を出發せるは明治四十一年六月十六日にして、先づ途を外蒙古に取り、庫倫、額爾德尼招、烏里雅蘇台、科部多を經て古城に至り、十月二十六日を以て新疆の省城たる烏爾木齊に達す。滞留二十餘日、南下して吐魯番に入り、東方喀喇和卓附近に於ける勝金口、木頭溝の諸地幷に西方雅爾湖に於ける故址を討ね、明治四十二年一月六日吐魯番を出發して同月十五日喀喇沙爾に入り、次で庫爾勒の地に出で、野村榮三郎は分れて庫車に向ひ、三月一日より四月下旬に至る間、或は其附近の踏査に從事し、或は沙雅爾幷に拜の附近を往來し、更に阿克蘇、瑪拉爾巴什の地を經由して喀什噶爾に達せり。又橘瑞超は二月二十一日庫爾勒を出發し、南下して海都河の下流コンチダリアと塔里木河との合流地を過ぎ、三月八日羅布沙漠に出で、更に進むこと三日にして察哈里克に到著す。是れより約一箇月の間羅布沙漠中を往來して漢代樓蘭國の故地を探究せる後、和闐に向つて出發し、巴什仕里を經て四月二十四日チェルチェンに至り、是れより山路を取りて尼雅に出で、克里雅を經て和闐に入る。六月二十一日更に此地を發し、葉爾羌を過ぎて、七月七日喀什噶爾に到著し、再び野村榮三郎と會す。八月二十日一行は此地を發して瑪拉爾巴什に至り、更に南行して九月一日葉爾羌に入り、唐代斫句迦國の故地を搜索せんとの目的を以て附近の溪谷を踏査せり。時に一行は新疆を辭するの準備をなし、行李を備へ、十月二日葉爾羌を出發し、カラコラム嶺を越えて印度カシュミールに入れり。

第三回の旅行は明治四十三年より大正三年に亙り、之に從事せるは橘瑞超、吉川小一郎の二人なり。初め橘瑞超は第二回の旅行を終り、印度を經て英國に赴きしが、明治四十三年八月倫敦を出發して先づ露國に入り、オムスクにて滊車に離れ塔爾巴哈台、庫爾喀喇烏蘇を經て同年十月十九日烏爾木齊に達す。滞留半月の後、吐魯番に向ひ、此地の附近に於ける故址を探究し、十二月二日吐魯番を出發して魯克沁に至り、更に南下してチョルタッグ、クルクタッグを越えて、アトミシブラックに到り、羅布の沙漠を縱斷して阿布達拉に達せり。明治四十四年一月五日此地を出發し、察哈里克を經てチェルチェンに至り、此地に於て塔克喇麻于沙漠縱斷の準備をなし、一行に對する約三十日分の氷塊糧食を携帶して二月四日北進の途に就く。時に季節稍〻遲かりし爲め氷塊の一部分は融解し、二十日の後には飲用水を缺き、頗る困難を感ぜしが、後二三日にして塔里木河の流域に出で、更に進んでチャディールに達す。是れより先、吐魯番にて分れたる英國人ホッブスは荷物を管理して庫車に在るの約あれば、直ちに此地に赴きしに、同人は恰も數日前天然痘を病みて死亡し、遺骸は喀什噶爾駐在の英國總領事の許に送られたることを知り、急行して喀什噶爾に至り、總領事と共に之を葬る。同地に滞在すること三週日にして、四月七日去つて和闐に向ひ、葉爾羌、喀拉噶里克を過ぎ、途すがら古の斫句迦國の地